

・須恵器坏碗（図54）

イ類 大きい平底で、口縁は斜上方に直に開くもの。底部は切り離した後、回転へう削調整。周辺部へう調整のものも含まれる。高台の付くものは、ほとんどみられなかった。



図54 須恵器坏碗実測図

ロ類 比較的小さい底部より、彎曲の強い体部が、斜方向に大きく開く。底部は回転糸切未調整。高台碗は、碗の底部端部に、低い高台を付す。

本遺跡でみられる、甕・坏碗類の主たる形態は以上のようなものであるが、①甕A-1・-2類と土師器坏a類、②A-3類とb-1類、③B類とb-2類、須恵器坏イ類、④C類c類とロ類が対応し、それぞれ鬼高Ⅲ期（①）、真間期（②、③）、国分期（④）に相当するものと考えられる。しかしながら、A類の甕は、多くの住居で伴出関係にあり、a類とb-1類の坏を伴出するものも多かった。

以上のことと、鬼高期の33号住居址の出土遺物、国分期の住居址からの出土遺物を考えて当遺跡をみると、6世紀半頃より10世紀半頃まで集落が営まれていたことが予想される。

3 奈良三彩小壺

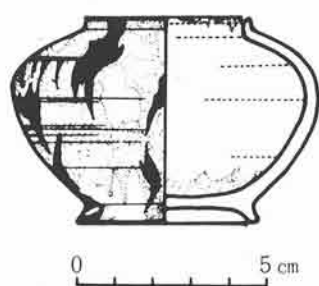
三彩をはじめとした彩釉陶器の多くは、官衙跡、祭祀跡、神社跡、古窯跡など特殊な遺跡から発見されている。そこでの使用形態も(1)火葬蔵骨器、(2)副葬品、(3)神に対する供献用、(4)官衙等での祭儀用、(5)仏教用具などが考えられている。

所在地	遺跡名	遺跡の性格	備考
三重県鳥羽市神島八代神社	平城宮跡	宮殿跡	蓋
奈良県奈良市佐紀町	小治田安万侶墓	墳墓	
奈良県奈良市七条山(伝)	土師器山遺跡		小銭が入る
奈良県山辺郡都祁村都介野甲岡	熊山戒壇址	祭祀遺跡	
奈良県山辺郡都祁村都介野蘭生	洲遺跡	祭祀遺跡	
兵庫県氷上郡山南町生田1845	沖ノ島遺跡	"	
岡山県赤磐郡熊山町奥吉原	中道道跡	集落址	東山道に近い。蓋
岡山県笠岡市大飛島洲	宝満山遺跡	祭祀遺跡	
福岡県宗像郡玄海町	平城京西市跡	官衙跡	
福岡県早良郡(伝)	大浦浜遺跡		
長野県上伊那郡箕輪町			
福岡県筑紫郡太宰府町			
奈良市大和郡山市			
香川県			

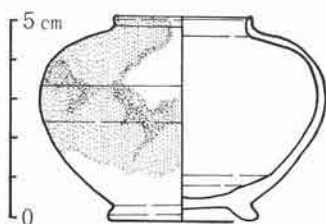
表9 奈良三彩小壺出土遺跡

- ・五島美術館編「日本の三彩と緑釉」1974
- ・香川県教育委員会「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅳ)」1981
- ・奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部工楽善通、森郁夫両氏ご教示による。

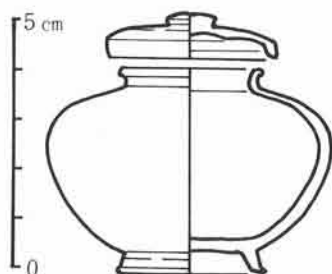
III ま と め



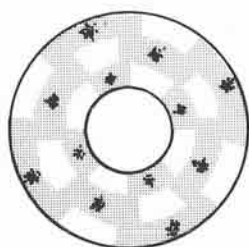
桧峯遺跡



沖ノ島No 12



奈良県山辺郡都祁村



沖ノ島施釉第II形式

図 55 奈良三彩小壺実測図

今、奈良三彩小壺（以下、三彩小壺と略す）関した発見例を概観すると、全国では表9の通りである。

上記表に記載された三彩小壺、蓋およびそれらの破片に共通していることは、材質や釉調が極めて似ていることである。^(注2)そして、供給した窯も必要に応じて平城京内または近くに築かれた官窯と考えられている。^(注3)

今回、桧峯で出土した三彩小壺は蓋が発見されなかったものの身は口径4.3cm、最大径8cm、器高5.3cmを測り、緑釉を主体に白釉、褐釉を配する。その胎土は卵殻色で、右回転のロクロ水挽き成形である。これは、今までに発見された三彩小壺に多く見受けられるところである。作調は丁寧で、器形は扁球形をなし強く肩を張り、外張りの高台をつける（図55）。

ここで、器形、施釉および色調に的を絞って、桧峯の三彩小壺と近似するものを他遺跡に求めてみよう。器形では沖ノ島1号遺跡出土のNo12三彩小壺が挙げられよう。^(注4)直に立つ短い口縁部、肩の張り、器高よりも大きな胴部径、高台の外張り加減等が指摘できる。さらに、口縁径：胴部径、口縁上端から胴部最大径に至る長さ：器高の値が桧峯のものとはほぼ一致をみることも興味深い。相違点は高台端部にみられる。高台端部に着目した場合、奈良県山辺郡都祁村出土のものが注目される（図55）。器形も全体的に桧峯のものとよく似てくる。

次に施釉のあり方をみると、沖ノ島出土奈良三彩小壺の施釉第II形式（この場合二彩）に近い（図55）。桧峯も側面周囲を緑と白で交互に8分割し、緑釉の中に褐釉を配し口縁部から底部までは3段に分かってある。しかし、底部周囲では8分割が崩れ10分割になっている（口絵写真）。

色調は奈良県大和郡山市の平城京西市跡出土の小壺破片（口縁部から肩部にかけて残）に酷似する。とくに、緑釉の淡い色調が指摘できよう。^(注5)

以上ごく簡単に比較を試みたが、沖ノ島のものをはじめとして多くの三彩小壺がその供給窯を畿内周辺の官窯に求められている現段階にあっては、桧峯の三彩小壺も供給先を官窯とし、小壺と共伴した土器をも考慮すると時期は8世紀を与えることが妥当といえよう。

さて、何故このような三彩小壺が桧峯の一住居址から発見されたのだろうか。今後の可能性をふまえて、今後少く述べてみたい。

最近、住居址からの三彩発見が多く報告されている。例をとれば、長野県中道遺跡や千葉県荒久(注6)遺跡、県内では十三宝塚遺跡、山王廃寺跡等が挙げられる。(注7)中道遺跡は東山道に沿っており陸路での祭祀に関連が求められ、荒久遺跡は国分寺付属の集落跡であることが確認されている。また、十三宝塚遺跡や山王廃寺跡もそれぞれ郡衙(注8)(?)や寺院跡と推定され、特殊な遺跡と結びつく住居址の場合が多いわけである。

しかるに桧峯の場合、I遺跡の位置と環境でみる如く国分寺からは9.5km、緑釉水瓶等を出土した山王廃寺跡からは8.3km、推定国府跡と称されている元総社の地からは8.4kmと隔たりをもつ。加うるに三者とも桧峯とは古利根川を挟んで対峙する位置にある。また、推定東山道からもだいぶ離れる。いずれにしても近年みる住居址出土例のように三彩の意味づけが桧峯の場合不可能なのである。

そこで、可能性の1は芳賀東部工業団地遺跡との関りに求めてみたい。現在、同遺跡は資料整理中ゆえ憶測の域を出ないことを断っておく。

「倭名類聚鈔」勢多郡の項には、深田、田邑、芳賀、桂萱、真壁、深渠、時沢、藤沢の8郷が記されている。しかし、現在までそれら郷の同定は行われていない。その中にある同遺跡では約40haの発掘調査を行い真間、国分期の竪穴住居址420、掘立柱建物跡189を検出している。とくに掘立柱建物跡にあっては、総柱や廂、隅丸方形の大きな柱穴をもつものが確認されている。さらに、同遺跡の南にある7-3区では、空閑地を囲むようにして建物跡や溝が分布している。遺物としては坏や甕をはじめとして、「神木」「林殿」「千万(か)」「雉所(か)」などの多くの墨書土器、銅製の巡方や丸柄等が発見されている。(注9)

こうした状況にあって、今回隣接地桧峯で三彩小壺が発見されたことにより、芳賀東部工業団地遺跡に何らかの公的施設が存在したと仮定すると、そこと何某かの結びつきをもった集落跡が桧峯であったとする考え方が生じてくる。

次に可能性の2として、芳賀東部工業団地遺跡以外の未発掘な公的施設を有す遺跡、または祭祀遺跡等が近くに存在するかも知れないということである。

可能性の3として、三彩小壺が発見された62号住居址の性格である。同住居址の規模や造りはごく一般的であるが、床中央に大きな平たい石が据えられ、匙状の鉄製品が出土しており、他住居址とは異なった様相を呈することから、62号住居が桧峯の集落にあって何らかの祭祀的な役割りを演じた特殊な遺構とする考え方である。三彩陶器を出土する遺構に、石と祭祀とが結びつく傾向をみることから、62号住居址＝祭祀の遺構の線もあながち否定し切れない面があろう。しかし、これが公的祭祀とどう結びつくかは不明である。

以上、三彩小壺について愚考をめぐらしてきたが、三彩陶器を日常の容器として位置づけていない現在、可能性を官衙をはじめとする公的施設や祭祀との関りでみていかざるを得ない。しかし、多分に意外性を孕むのも歴史である。そこで、全国の多くの住居址から出土する三彩や今回の桧峯

出土例をみるときに、三彩陶器は貴重品として扱われ、ごく限られた有識官人などの特権階級の人々の日常生活の中に入りこんでいたのではなかろうか、という考え方が少しく残る。

それにしても、ごくありふれた竪穴住居址からはほぼ完形の三彩小壺が出土した例は、全国的にみても稀である。極めて少ない例だけに大胆な予想もまたできる。願うことは今後こうした出土例が増え、桧峯遺跡から発見された三彩小壺の意味づけがはっきりすることである。

付 記

県下で三彩小壺の完形品を伝えるのが、富岡市の貫前神社である。上杉管領家より奉納されたものだが、奉納年月日は不詳。

胎土は砂粒含みの卵殻色土で、ロクロ水挽き成形をしている。施釉は口縁周囲を黄と緑で六分割し、緑彩はムラのある濃緑で、肩部より曲線を描いて底部に至る器形は重量感を醸し出す(図56)。なお、蓋は桧峯同様無い。



図56 貫前神社と桧峯遺跡の奈良三彩小壺

注1 檜崎彰一「日本陶磁全集5 三彩・緑釉」中央公論社

2 1に同じ

3 堀江門也「多彩陶器焼成窯について」『考古学ジャーナル No196』1981

4 宗像大社復興期成会「宗像沖ノ島」1979

5 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第一調査室長工楽善通、同所第二調査室長森郁夫両氏のご教示による。

6 1と同じ

7 群馬県教育委員会「十三宝塚遺跡発掘調査概報 II」1976 現在、郡衙跡として確定するには至っていないが、火舎獣脚や小壺、鉢、碗等の多彩釉陶器の一部を出土している。

8 前橋市教育委員会「山王廃寺跡第4次発掘調査概報」1979

9 前橋市史編さん委員会「前橋市史第1巻」